

平成 26 年度授業づくり拠点校（活用力向上研究事業）実践事例

調査研究名	生徒の活用する力を高めるための授業改善
研修主題	分かる・できる・楽しい授業の実践 ～毎時間の授業評価を活用した授業改善を通して～

1 はじめに

本校は、萩市中央部の市街地に位置し、市内中学生の半数近くが在籍する。また、保護者や地域の教育に対する関心と期待は高く、コミュニティ・スクールとして、また、地域協育ネットにおける多くの方との連携・御支援をいただきながら教育活動を行っている。

生徒は、明朗快活で礼儀正しく、文武両道・進取の気風をもって学校生活を送っている。一方、学習においては学力格差が大きく、全国学力・学習状況調査においては、国語科を始め多くの教科に共通して次の点に課題がみられる。

- (1) 文章や資料から必要な情報を取り出し、それらを用いて作文する能力
- (2) 根拠を明確にして自分の考えを書く能力
- (3) 条件を満たして、論理的に書く能力

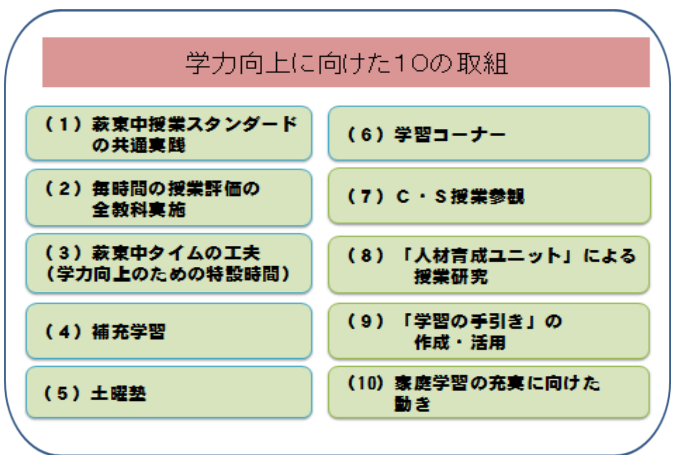
また、過去 4 年間毎年 2 名ずつの新規採用教員が配置され、臨時的任用教員および非常勤講師を含めると、教職経験年数が 3 年未満の割合が 46% という非常に若い教員構成である。そこで、人材育成を図りながら授業における教育水準を一定に保ち、生徒の学力向上を図るため、学校・組織・授業を開いての研修を進めた。

2 全校体制で行う「学力向上に向けた 10 の取組」

本校では、学力向上に向けて、全校体制で右の 10 の取組を行っている。

「補充学習」「土曜塾」「C・S 授業参観」等、校区内小学校教員や保護者・地域住民・退職校長・高校生などの学習支援ボランティアの協力を仰ぎながらすすめている事業も多い。

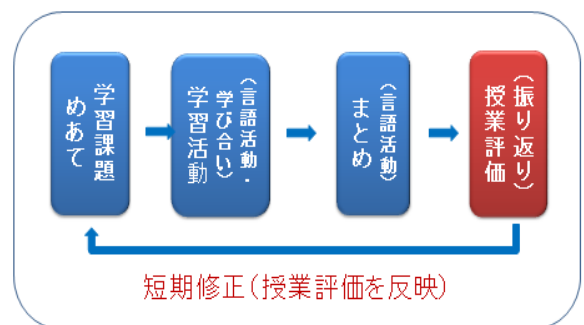
生徒の「活用する力」を高めるための特徴的な取組は次のとおりである。



(1) 萩東中授業スタンダードの共通実践

全国学力・学習状況調査結果の分析からも、生徒が1時間の授業の「めあて」や「振り返り」が確実に行われていると認識している割合が高いほど、学力が高い傾向にあるといわれている。

本校では、生徒に付けたい力を「めあて」、具体的な学習活動を「学習課題」として提示し、ペア学習やグループ学習で友達との関わりを重視して学習を進めたり、その日の授業評価を次時の授業展開へ反映させたりしている。



萩東中授業スタンダード

## (2) 毎時間の授業評価の全教科実践

右は、数学科における毎時間の授業評価表である。全教科で4つの共通項目について3段階の評価をし、さらに各教科ならではの項目も取り入れている。

学習に対する疑問・感想・分かったこと等の自由記述欄は、その時間の授業の生徒の理解度を把握するとともに、生徒のつまずき、指導方法の工夫改善に役立てた。一人の生徒の疑問が、次時の学習課題となることもある。

数学科  
授業を振り返って / 年 / 組 / 番 氏名 ( )

◎よ／あてはまる ○ややあてはまる △いいえ

共通の項目

月日	学習内容	共通の項目				疑問や感想など
		1	2	3	5	
		授業の内容がわかった	支はていねいに教えてくれた	振書がわかりやすかった	授業が楽しかった	
5/19	算法の計算	◎	◎	◎	◎	今日の計算を家でやり直したい
5/16	除法の計算	◎	◎	◎	◎	早く計算できるように練習したい
5/19	逆数	◎	◎	◎	◎	逆数の逆数をもっと早く覚えたい
5/20	除算(整数)	◎	◎	◎	◎	除算はわる数を逆数にしてわる
5/20	乗除(分数)	◎	◎	◎	◎	わり算はかけ算にひきかえて
5/20	加減乗除	◎	◎	◎	◎	よく練習をすれば計算が速くなる
5/20	総復習	◎	◎	◎	◎	総復習をすれば計算が速くなる

## (3) 萩東中タイムの工夫

毎週1回、読解力・思考力・表現力等を鍛えるため、「やまぐち学習支援プログラム」「学力定着状況確認問題」等を活用して、学力向上のための特設の時間「萩東中タイム」の授業を行っている。通常の教科担当に限らず、学年を超えた指導体制で、生徒の課題発見・課題解決にあたっている。

## (4) 人材育成ユニットによる授業研究

経験年数4～10年目の「サポーター」をチームリーダーとし、主任級の「メンター」、1～3年目教員、臨採・非常勤、養護・栄養・事務、学校運営協議会・てごの会の委員からなる6つの人材育成ユニットを組織し、各ユニット月1回以上の授業研究を行っている。

教員以外の視点による指摘は、授業づくりに大きな成果をあげている。

1 ユニット構成

「人材育成ユニット」における授業研究体制について

萩東中学校

管理職	グループ	メンター	サポーター (チームリーダー)	1～3年目 教員	臨採 非常勤	養護・栄養 事務	学校運営協議会 「てごの会」	アドバイザー	
校長 養育教頭 内田教頭 (学力向上推進リーダー) 宇田教頭 (初任研教科指導担当・大井中学校)	A	①	山本(数学)	西山(国語)	林浩(数学)	山田(英語)	小崎由紀 奥田和彦	木原 (音楽・教育相談) 弘田 (社会・特別支援)	
		②	松浦(保健体育)	藤田(理科) (調剤)(理科)	松野(英語)	長岡(国語)	泉由(養護)		藤山光雄 小松順子
	B	③	明山(英語)	岩田(国語)	林奈(美術)	藤貴(理科)	滝部(事務)	藤佳奈代 伊藤京子	林仁 (社会・教務) 音藤 (社会・研修)
		④	青木(保健体育) 阿波(国語)	藤井(音楽)	兼重(家庭)	井町(英語)	横山(栄養)	幸坂園美 村谷幸治 田中弘美	
	C	⑤	中村(英語)	浅賀(数学)	大庭(技術)	白石(理科)		廣畑かほり 諸岡皓二	萩市教育委員会 担当指導主事 やまぐち総合教育支援センター 研究指導主事 附属山口中授業アドバイザー 等
		⑥	新谷(社会)	高木(保健体育)	岩崎(数学)	岡田(家庭) 徳玉丸(国語)	米原(養護)	尾河あおい 鈴木 隼 石井 智	

2 研修方法

- ①～⑥のグループ単位で授業公開とミニ研修を行う。(基本同日開催)月に1回を目安とする。
- サポーター(チームリーダー)が中心となり日種等の調整を行う。
- 教務(日課係)は、同グループ教員の授業を開ける。授業者については公開授業後の1時間をあける。
- 授業者は反省型指導案を準備する。

## 3 公開授業(平成26年11月13日)

### (1) 学習指導案

### 第3学年 国語科学習指導案

指導者 教諭 西山 太郎

#### 1 単元名 「状況を読む」

教材名「故郷」魯迅 竹内好訳(光村図書)

#### 2 単元構成の意図

##### (1) 文章中から根拠を指摘して、自分の考えをもつことに難しさを感じている生徒が多い。

学習指導要領の「読むこと」の指導事項に「文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。」とあるように、様々な文章を読むことを通して、そこに表れているものの見方や考え方から、自分の考えをもつことが求められている。1学期に文学的作品「握手」(井上ひさし)の授業を通して、登場人物の言葉や動作から、人柄や心情をとらえる

ことを行った。この作品は、ルロイ修道士の指言葉や奥行きのある二重構造などの特徴ある文章のため、生徒は描写を意欲的に注意深く読み、内容をとらえていった。しかし、ルロイ修道士の生き方や「わたし」の思いを読み味わい、主題に対して自分の考えを深めるところにまでは至らなかった。

4月に行われた全国学力・学習状況調査にも見られるこの結果を受けて、自分の考えを発言する際に、根拠となる文章を指摘することを意識させて授業に取り組んできた。その中で、少しずつではあるが、漠然とした印象に終わらず、自分の考えを明確にもつことができるようになってきていると感じる。

## **(2) 文章表現を読み味わい、作者の意図を読み取ることを通して、自分の考えをより深くもつことができる作品である。**

「故郷」は、中国近代文学の父とよばれる魯迅の作品である。既習の文学作品は、登場人物へ感情移入しやすく、生徒も高い関心をもって学習してきたが、「故郷」は20世紀前半の中国が舞台であり、時代背景もとらえにくく現代の中学生には理解しにくい部分もある。しかし、情景描写や人物描写が社会状況や登場人物の心情を大きく反映し、味わい深い表現と崇高な主題を学ぶ教材として、長い歴史を積み重ねている名作である。随所にある人物や情景の具体的な描写を主体的に読み味わい、そこに織り込まれた作者の意図を読み取ろうとすることで、自分の考えをより深くもつことができる作品である。

したがって、人間と社会との関わりを考えながら読むことを通して、自分の考えを形成していく力を鍛えるために適した教材であると考ええる。

## **(3) 二つの表現の比較により、その印象の違いを根拠をもって説明することを通して、確かな読みとし、自分の考えをより深めさせたい。**

本教材は、作品の時代背景が生徒の生活体験と異なるので、読み深めるためには、文章中の言葉を根拠に、イメージを膨らませて状況を読み深めさせることが大切になる。特に「思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。～歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」の最後の四行に込められた「私」の思いについてとらえ、そのことに対する自分なりの考えをもたせることを中心として展開したい。その際、変わり果てたレントウやヤンお婆さんの姿から、「厳しい現実が眼前にあることを前提としていながらも、希望を抱いている」点に着目させることを疎かにしてはならないと考える。

そこで、指導に当たっては、最後の四行と高村光太郎の「道程」の詩とを比較する活動を通して、共通する「道」に関する文章表現から、「私」の状況には厳しい現実があるということに気づかせる場を設定する。そして、人間や社会についての自分の考えもより深めながら形成していく力をつけさせたいと考える。

### **3 単元の目標**

故郷や周りの人々に対する「私」の心情の変化を読み取りながら、状況の変化の中で生きる「私」の生き方についてとらえ、人間と社会について自分なりの考えをもたせる。

### **4 指導計画（全6時間）**

- 第一次 作品を通読し、登場人物の人間関係を確認するとともに初発の感想をまとめる。（1時間）
- 第二次 初発の感想を交流し合い、場面設定を確認し、「帰郷」の場面を読み取る。（1時間）
- 第三次 思い出の中のレントウ、再会したヤンお婆さんの様子を情景や人物描写に着目しながら読み取る。（2時間）
- 第四次 再会したレントウの様子や「離郷」の場面について、情景や人物描写に着目しながら読み取る。（1時間）
- 第五次 「道」に関する二つの文章（詩）を比較し、印象の違いを考えることを通して、「私」の思いについて、自分の考えを深める。（1時間）【本時】

## 5 本時案

(1) **主眼** 「道」に関する二つの文章（詩）を比較し、印象の違いを考えることを通して、最後の四行に込められた「私」の思いについて、自分の考えを深めることができる。

(2) **準備** ワークシート ホワイトボード ペン

(3) **学習の展開**

学習内容・学習活動	指導上の留意点
<p>① 本時の学習のめあてを確認する。</p>	<p>① ワークシートを配布し、本時のめあては最後の四行について考えることを提示する。</p>
<p>〈めあて〉最後の四行に込められた「私」の思いについて、自分の考えを深める。</p>	
<p>② 最後の四行は、誰に対して、どのような願いを込めているか確認する。 〈若い世代〉に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「私」たちとは違い、お互いの心を一つにできる新しい時代を築いてほしいという願い。</li> </ul> <p>〈ルントウやヤンおばさんたち〉に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今の生活を見直し、自分たちで自立した生活を送れるようにしてほしいという願い。</li> </ul> <p>〈私〉自身に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・若い世代の心が通い合えるような時代にしなければならぬという願い。</li> </ul> <p>③ 最後の四行と高村光太郎の詩を比較し、最後の四行が前向きか前向きでないか、ワークシートに立場を明確にして、その理由を書く。</p>	<p>② P 120 L 19～P 121 L 16を読み、対象を明確にさせ自分の考えを書かせる。 ここは、教科書の記載内容にとどめても差し支えないので、ワークシートを活用して効率よく自分の考えを記入させる。 出た意見を三者に分類し、教科書の記述をもとにそれぞれの考えを共有させる。</p> <p><b>授業形態</b> 【ペア】→【全体での共有】</p> <p>③ その理由の根拠となる文章を指摘しながら、自分の意見を書かせる。</p>
<p>〈学習課題〉最後の四行と高村光太郎の詩「道程」を比較し、「私」の希望に対する思いを読み深めよう。</p>	
<p>④ 互いの考えを根拠をもって説明し合い、「私」の思いを読み深める。 〈最後の四行の方が前向き派〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最後の月夜の情景から、英雄であったルントウの姿を思い出した上で抱いた思いであるから。</li> </ul> <p>〈最後の四行の方が前向きでない派〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ルントウやヤンおばさんの変わり果てた姿から現実には厳しいと感じているから。</li> <li>・若い世代に希望は託しつつも、希望を達成する困難さも感じているから。</li> </ul> <p>◎ ホワイトボードは、「前向き派」「前向きでない派」に分けて黒板に掲示する。</p> <p>⑤ 本時の学習を通して「私」の思いについて考えたことを書く。</p> <p>⑥ 授業評価カードを記入する。</p>	<p>④ 2つの文章に出てくる「道」に対する印象の違いをもとに、「私」の希望の実現を望みつつも困難さを感じている点を、生徒同士の発言で深められるよう、支援する。</p> <p><b>授業形態</b> 【グループ】対立した意見を尊重し、そう感じた理由や疑問に思ったことなどについて質問し、自分の考えを深めるよう支援する。 →【全体】座席をコの字型にし、相手を意識しながら、班で出た意見をホワイトボードの記載内容により、根拠をもって発表させる。 ※ 生徒の発言が深まらない場合は、当時の厳しい中国の社会状況についても補足説明をする。</p> <p>⑤ 読みの深まりを自分自身で確認できるようなモデルを示す。</p> <p>⑥ 授業評価カード自由記述欄にも、本時の活動の感想を記入させる。</p>

1 主眼

「道」に関する二つの文章（詩）を比較し、印象の違いを考えるところを通して、最後の四行に込めた「私」の思いについて、自分の考えを深めることができる。

2 指導上の留意点

- ① 最後の四行と高村光太郎の「道程」の詩を比較し、最後の四行の方が前向きさが感じられないことをしつかりととらえさせる。
- ② 立場を明確にして、本文中から根拠を指摘して、自分の考えをもたせる。
- ③ 生徒の読みの深まりが確認できるような記述のモデルを提示する。

評価

「道」に関する二つの文章（詩）を比較し、印象の違いを考えるところで、「私」の思いについて、自分の考えを深めることができたか。

故郷

魯迅／竹内好 訳

【めあて】

最後の四行に込められた「私」の思いについて、自分の考えを深める。

1 《「私」の思い》をとらえよう

【生徒の意見例】

- 〈若い世代（シユエイションやホンル）に対して〉
  - ・「私」たちとは違い、お互いの心を一つにできる新しい時代を築いてほしいという願い。
- 〈ルントウやヤンおばさんに対して〉
  - ・今の生活を見直し、自分たちで自立した生活を送れるようにしてほしいという願い。
- 〈私〉に対して
  - ・若い世代がずっと心を通い合えるような時代になければならないという願い。

2 【学習課題】

最後の四行と高村光太郎の「道程」の詩を比較し、「私」の思いに対する考えを深めよう。

前向き派

--	--	--	--

前向きでない派

--	--	--	--

- 〈前向き〉
  - ・最後の月夜の情景から、英雄であったルントウの姿を思い出した上で抱いた思いであるから。
- 〈前向きでない〉
  - ・ルントウやヤンおばさんの変わり果てた姿から現実を厳しいと感じているから。
  - ・若い世代には希望は託しつつも、希望を達成する困難さも感じているから。

3 《「私」の思い》について考えたことを書こう

- ◆ ① 本時の流れ
  - ・ ① 本時の流れを確認させる。
  - ・ ② 最後の四行について、誰に何を確かめたいかを確認する。
  - ・ ③ 最後の四行と高村光太郎の「道程」の詩を比較し、自分の考えを立場を明確にし、その理由を記入する。
  - ・ ④ 互いの意見を交流し、深める。
  - ・ ⑤ 本時の学習を通して「私」の思いについて考えたことを書く。
  - ・ ⑥ 紹介し、評価する。
- ◆ ① 本時の流れを確認させる。
- ◆ ② 最後の四行について、誰に何を確かめたいかを確認する。
- ◆ ③ 最後の四行と高村光太郎の「道程」の詩を比較し、自分の考えを立場を明確にし、その理由を記入する。
- ◆ ④ 互いの意見を交流し、深める。
- ◆ ⑤ 本時の学習を通して「私」の思いについて考えたことを書く。
- ◆ ⑥ 紹介し、評価する。

## (2) 研究協議における意見・提案

西山教諭は、今年度10年目を迎え、一斉授業からの脱却、生徒が全員参加して学び合える授業づくりをめざして春から実践を重ねた。生徒とともにつくりあげる授業に対して、次の意見・提案をいただいた。

- 学習規律が整っており、学習理解が進みやすい。
- 笑顔で和やかに、安心して語れる雰囲気があるので、生徒の表現する意欲が高まっている。
- 最初の課題では、一人学びの後にペアで意見交換したので、自分の考えをはっきりと伝えることができている。自分の言葉で表現することの大切さを実感した。
- 自分と他者、前時と本時について、自分の考えをもつ時間が確保されているのがよい。授業者がどう切り返していくか、作品全体を見ることの大切さを感じた。
- 「故郷」の最後の4行に絞る斬新さを感じた。「前向きでない」と考える生徒の揺さぶりを「故郷」の表現からかけることが大切である。「私」の苦悩を具体的に書かせるとよい。
- 考える課題が妥当か疑問である。「道程」と比較するためには、詩の内容を認識することが必要ではないか。比較することはよいことだが、手立てが難しかったのではないか。
- 課題①と②を入れ替えてもよいのではないか。

この公開授業は、本校の「人材育成ユニット」研修も兼ね、学校運営協議会委員も2名参加されていたため、研究協議の場で地域住民の立場から感想をいただいた。

以前と比べ、生徒が年々落ち着いてきているのを感じる。以前は生徒がピリピリして縮こまっていたが、今日の授業では、生徒が笑顔で積極的に発表する姿が多く見られた。

先生方は、すごく考えて授業をしているのだとわかった。今、生徒たちは話すことがない世界になりがちだが、国語科授業を通して、話す力、書く力を付けることができている。さらにコミュニケーション能力を身に付けさせたい。

## (3) 指導助言の内容

授業づくりについて、次のような御指導をいただいた。生徒の思考の必然性をどのように仕組んでいくのか、さらに研修を重ねていきたい。

- この時間に何を学ぶのか、何を学んだのかを明確にすること。子どもにとって学ぶ必然性があるかどうかポイントとなる。
- 中学3年の読むことの目標には、「文章の展開や表現の仕方」とあるが、「描かれた内容」と「表現のされ方」がポイントである。比較の手法はよいので、「道程」のように詩ではなく、散文を取り上げたほうがよい。比較することで何が際立つかである。
- 「めあて」と「学習課題」は各学校においてどのようにとらえるのか、ベースをはっきりとさせること。どんな力を付けたいのか「ゴール」を先に考えることで授業の構造上必要な条件が明確になる。生徒は「めあて」を見ることにより、習ったことを使おうとするので、子どもの思考に見通しを付けさせることができる。
- 「振り返り」には、感想ではなく、何を書かせるか指示すること。「よくわかった」ではなく「何が分かった」と書けるキーワードが必要である。



## 4 取組の成果

### (1) 生徒の思考の深化

西山教諭の学び合う学習活動を進める中で、生徒たちは国語科学習の楽しさを感じ取っていった。教科書の言葉を根拠に説明する。友達同士の関わり合いの中で、自分の考えを言葉にすることによって理解が深まる。それを、ホワイトボードを使って、相手に伝わる言葉を選んで表現する中で、さらに意見がもみ上げられる。そして、伝わったことがさらに次の課題へとつながる喜びである。

また、毎時間の授業評価を通して、初読では文章の難解さに戸惑った生徒が、次第に情景が読め、人物像が明確になり、心情に思い抱く楽しさに浸っていくのが見て取れた。

### (2) 学力の向上と定着

こうした授業スタイルを他学年でも継続した結果、学力定着状況確認問題の4月と10月の比較からも、正答率の向上がみられる。

また、学校評価からは、授業内容が分からないときにそのままにする生徒が減少し、先生や家族に聞くよりも「友達に聞く・自分で調べる」と応えた生徒が、1年生では51%から59%に、2年生では44%から65%に増えるなど、主体的に考えようとする姿勢が身に付いてきている。

### (3) 学校全体での取組や他教科への広がり

授業研究の一つに、毎週月曜日放課後の自主研修会「桜塾」において、教員による模擬授業および指導案検討会を開催した。他教科の教員の発想は、生徒の思考に近いことが多く、国語科教員が当然だと思い込んでいることが疑問として感じられることを知り、新しい視点での展開も工夫できた。また、映像のイメージが必要なときには、英語科のピクチャー・カードに相当する教具を準備することもヒントとしていただいた。



## 5 今後の取組

### (1) 小中連携による取組事項

- ① 生徒一人ひとりが学ぶ場の設定
- ② 生徒の学習過程の可視化
- ③ 低学年からスモールステップでの条件作文指導
- ④ 書く力を付けるための推敲
- ⑤ 学校の教育活動全般にわたる言語活動の充実

### (2) 「毎時間の授業評価」からの授業改善

- ① 学ぶ必然性のある課題設定の仕方について研修を深化する。
- ② 授業評価と自由記述により、「めあて」に沿った学習内容の定着を確認する。
- ③ その時間の指導方法の工夫点を伝えて評価させるなど、授業力向上のために自由記述を活用する。
- ④ 課題に引きつける話し方、学力の定着の図れる板書の仕方、子どものつまずきの把握の仕方等、指導スキル向上の研修を重ねる。

以上のように、小中連携の重点取組事項や「毎時間の授業評価」の取組を通して、生徒の活用する力をさらに高めるための授業改善を継続し、保護者・地域との連携のもと全教職員が一丸となり、学力向上・学力定着の充実に努めていきたい。